祝谷大地ケ田遺跡３次調査・祝谷６号墳 現地説明会資料

平成 25 年 3 月 16 日（土）
公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
埋蔵文化財センター

１．はじめに

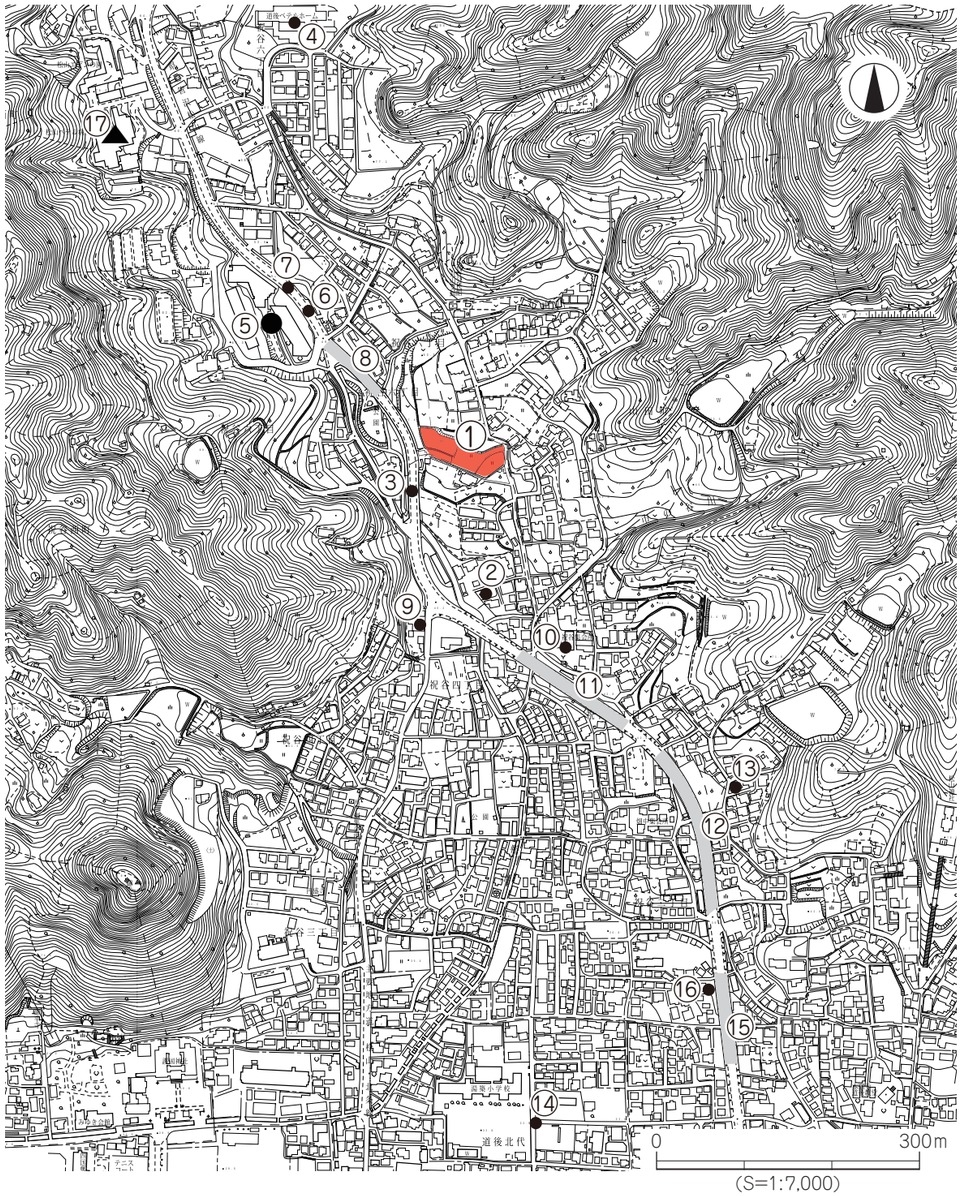
本調査は、民間の開発に伴う発掘調査です。愛媛大学城北キャンパスを中心とした松山城よりも北のエリアにひろがる弥生時代を中心とした遺跡の集まりを「道後城北遺跡群」と名づけていますが、祝谷周辺の遺跡もこの遺跡群の一角に含まれています。祝谷周辺では、これまで病院やマンションの建設の際に調査が行われたほか、近年では都市計画道路道後祝谷線整備に伴う調査が行われ、主に弥生時代、古墳時代を中心とする遺構が数多くみつかっています。弥生時代では中期から後期（今から 1,800 ～ 2,100 年くらい前）にかけての遺跡が多く、中期で有名な遺跡は祝谷六丁場遺跡や祝谷畑中遺跡で、たくさんの土器や石器を伴う土坑（人為的に掘られた穴のこと）や溝が発見されています。また、六丁場遺跡は後期の平形銅剣が出土したことでも有名な遺跡です。

古墳時代では、丘陵上で祝谷１～５号墳といった古墳の調査が過去に行われており、そのほかにも周辺の丘陵上には古墳が多数分布することが知られています。

２．調査の概要

調査は、１区と２区の２ケ所に分けて行いました。１区では、弥生時代中期中頃の貯蔵穴が密集してみつかっています。貯蔵穴とは、穀物などの食料を保管しておくための地下倉庫のことをいいます。広さ 350㎡程度の調査区に、直径 0.8 ～ 2.5 m、深さ 10 ～ 100㎝程度の円形のものが 38 基設けられています。これらの遺構は、北東からのびる丘陵の先端部、谷を見おろす部分に配置されています。

２区で発見された遺構のうち注目されるのは、祝谷６号墳と名づけた２基の横穴式石室を持つ古墳です。東西に細長い調査区のため墳丘のかたちははっきりわかりませんが、第１石室を中心に、東西 24 m程度の墳丘規模です。第２石室は同じ墳丘を利用して、第１石室の東およそ４ｍの位置に後に設けられたものです。



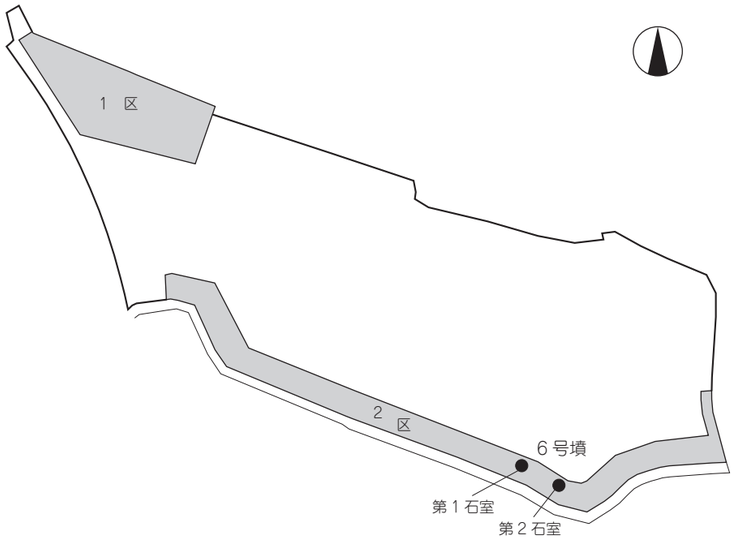
① 祝谷大地ケ田遺跡（3 次）祝谷 6 号墳
② 祝谷大地ケ田遺跡（1 次）
③ 祝谷大地ケ田遺跡（2 次）
④ 祝谷アイリ遺跡
⑤ 祝谷六丁場遺跡（1 次）
⑥ 祝谷六丁場遺跡（2 次）
⑦ 祝谷丸山遺跡（1 次）
⑧ 祝谷丸山遺跡（2 次）
⑨ 祝谷西山遺跡
⑩ 祝谷本村遺跡（1 次）
⑪ 祝谷本村遺跡（2 次）
⑫ 祝谷畑中遺跡（1 次）
⑬ 祝谷畑中遺跡（2 次）
⑭ 土居窪遺跡（1 次）
⑮ 土居窪遺跡（2 次）
⑯ 土居窪Ⅲ遺跡
⑰ 祝谷 1 号墳～ 5 号墳

第 1 図　周辺遺跡分布図

３．わかったこと

調査地周辺の祝谷地区には、永谷川（大川）や丸山川、市の谷川などの川が走り、これらの川によって分断された丘陵がヤツデの葉状にひろがる地形となっています。弥生時代の集落は、これらの丘陵単位で形成されていたものと思われます。そういった集落のひとつが調査地周辺の丘陵上にひろがっているものと考えられます。居住していた住まいなどは、貯蔵穴群が発見された１区よりも北東から東方向に分布しているものと考えられ、その居住区の西から南西方向、谷を見おろす集落の端近くに貯蔵穴群を計画的に配置し、共同管理していたものでしょう。

２区で発見された祝谷６号墳は、その墳丘規模と豊かな副葬品から有力な地方豪族一族の墓と考えられます。第１石室は、埴輪（はにわ）が立て並べられた差し渡し 24 m規模の墳丘とともに６世紀中ごろに築造され最初の埋葬を行い、続く６世紀後半に追葬（ついそう）が行われたものです。この石室には古くからのステータスシンボルである青銅鏡（珠文鏡（しゅもんきょう））が副葬されました。第２石室では６世紀の後半から７世紀初頭の間に２体の埋葬が前後して行われたと考えられます。先につくられた第１石室に伴う墳丘を利用して新しく石室を追加して、結果的に一墳丘二石室になったものです。第２石室出土の圭頭太刀（けいとうたち）は、畿内政権との強い関わりを示す儀仗刀（ぎじょうとう）（権威を示すための飾り刀）です。地方豪族一族が畿内政権を中心とした政治体制に組み込まれていく様子が、両石室のありかたからうかがえます。



第２図　調査地測量図

祝谷大地ヶ田遺跡３次調査１区

【検出遺構】

溝　（SD）：３条〔弥生時代以降〕
土坑（SK）：39 基〔弥生時代：38 基・室町時代：1 基（SK120）〕
柱穴　　：44 基〔弥生時代～室町時代〕

【出土遺物】

弥生土器〔前期～中期〕
土 師 器〔古墳時代～室町時代〕
陶 磁 器〔室町時代〕
石　　器〔石鏃・石庖丁・石斧・スクレイパー〕

【調査の概要】

１区では、弥生時代中期中頃、今から約 2,000 年前に使われた貯蔵穴群が見つかりました。貯蔵穴とは縄文時代から弥生時代にかけて作られた穀物などの食料を保管するために地中に掘られた穴のことで、上方には小さな屋根が付けられ雨を防いだものと考えられています。断面の形態は入り口が狭く、底部が広いフラスコ形を呈しています。

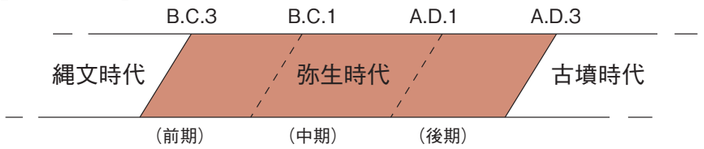
今回見つかった貯蔵穴にも、このような形態の穴が数多く見られましたが、中には袋状や筒状、逆台形状を呈するものもありました。規模も様々で、掘り方の直径は 1m 前後のものから最大で 2.5m のものがあり、深さも 10㎝程度の比較的浅いものから、1m を超える深い穴も見られました。残念ながら、貯蔵に直接関連するような穀物等は出土しませんでしたが、割れた土器片や石器が数多く出土しました。このような状況から、貯蔵穴として機能を終えたあとにゴミ捨て場として再利用されたものと考えられます。

なお、弥生時代中期中頃以降、貯蔵施設は掘立柱建物へ移り変わり、貯蔵穴は弥生時代後期以降、西日本ではほとんど利用されなくなります。

写真１
遺構完掘状況（北より）

祝谷大地ヶ田遺跡３次調査１区

【時代区分】



※弥生時代は紀元前３世紀から紀元後３世紀までの約 600 年間あり、200 年毎に前期・中期・後期と時期区分されています。

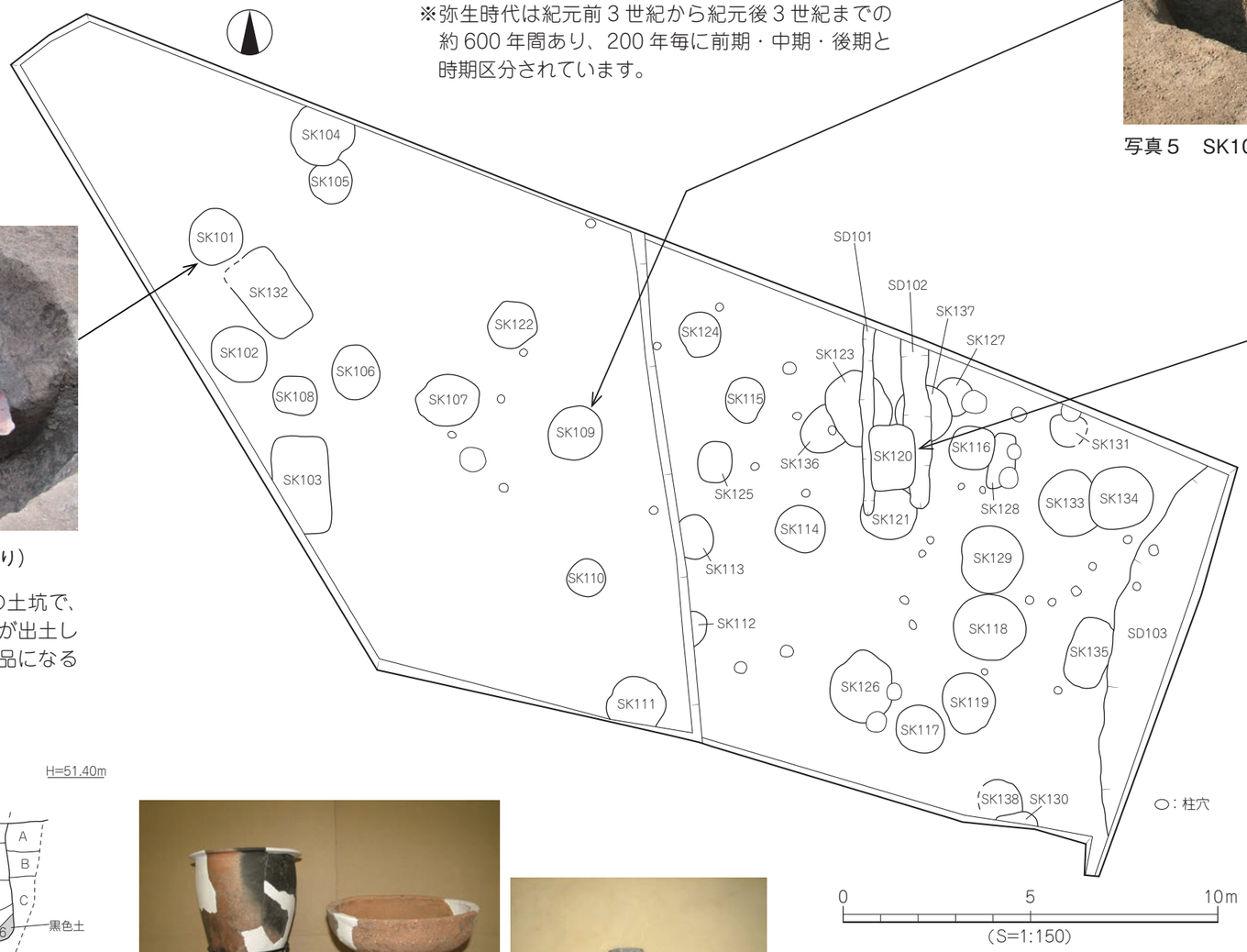


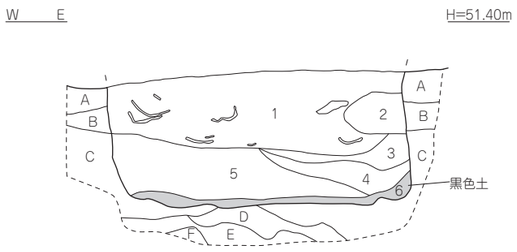
写真２　SK101 遺物出土状況（南より）

SK101 は直径 1.5m、深さ 70㎝の土坑で、土坑中位付近から割れた土器や石器が出土しました。この中には復元すると完形品になる土器が含まれていました（写真３）。

写真５　SK109 遺物出土状況（東より）

写真６　SK120 遺物出土状況（西より）

SK120 は長径 1.7m、短径 1.1m、深さ 20㎝の土坑で、室町時代に使われた土釜の破片が出土しました。



SK101 の断面形態は部分的にフラスコ状を呈しており、底面には厚さ１～2㎝程度の硬く締まった黒色土が敷き詰められていました。おそらく、底面の保護の為に施されていたものと思われます。

写真３　SK101 出土遺物①
（左：甕、右：高坏）

写真４　SK101 出土遺物②
（左：石鏃、中：石斧、右：スクレイパー）

【用語解説】

遺　構（いこう）：竪穴式住居や掘立柱建物など、過去の人類が残した不動産的なもの

遺　物（いぶつ）：土器や石器など、過去の人類が残した道具一般

土　坑（どこう）：地中に掘られた穴で、竪穴住居などの性格が明確なもの以外の遺構

土師器（はじき）：古墳時代から使用された弥生土器の系譜を引く素焼き土器

石鏃（せきぞく）：矢の先端に付けられた小型の石器

扁平片刃石斧（へんぺいかたはせきふ）：木材を削ったりえぐったりするための石器

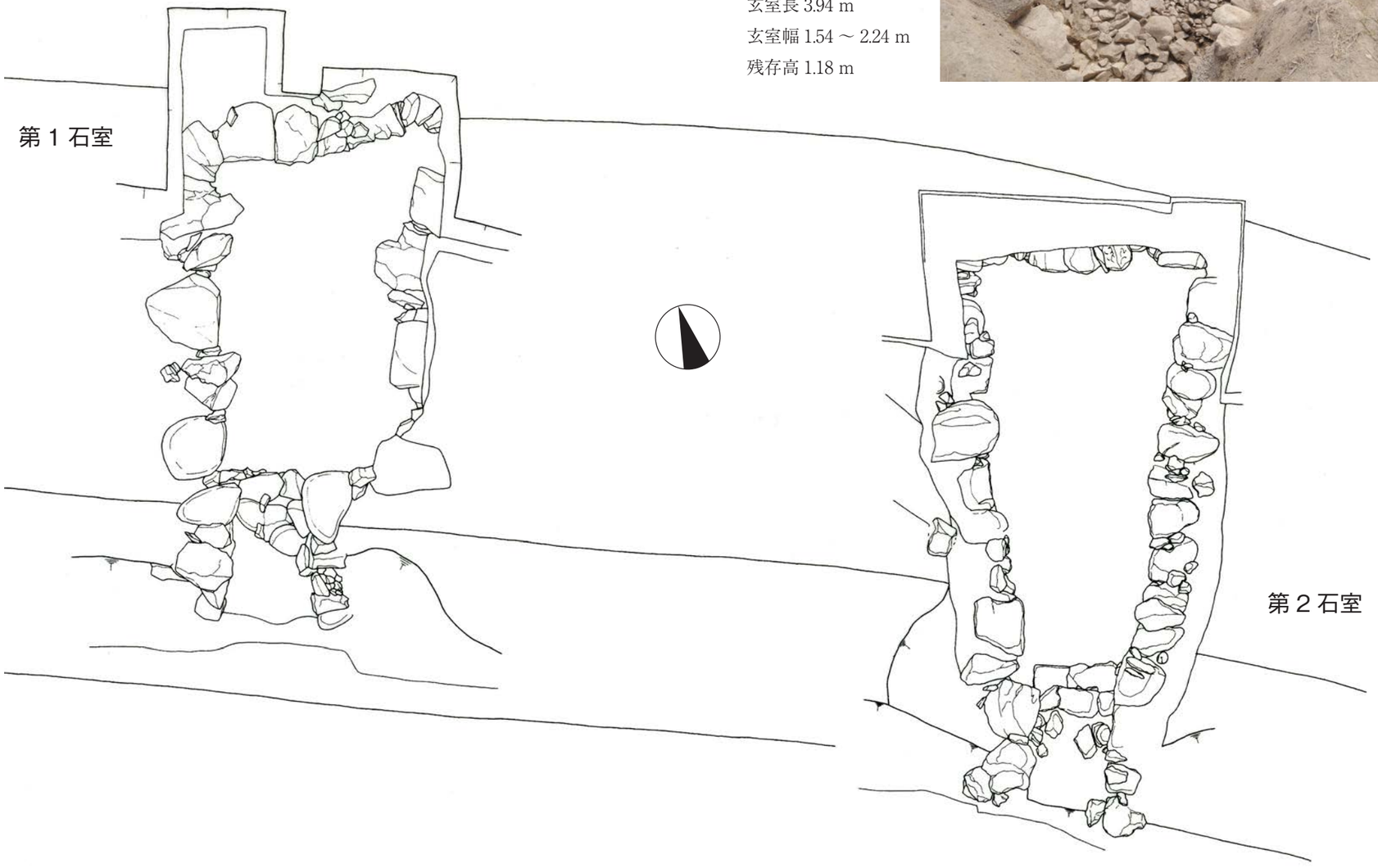
スクレイパー：削ったり掻きとりなどに使用された刃状の石器

祝谷６号墳

・墳丘規模：東西 24 m
・周溝出土遺物：埴輪（はにわ）片、須恵（すえき）器片

第１石室
・時　　期：6 世紀中～後半
・石室形態：両袖形横穴式石室
全　長 5.15 m
玄室（げんしつ）長 3.62 m
玄室幅 2.4 m
残存高 1.85 m

第２石室
・時　　期：6 世紀後半～ 7 世紀初頭
・石室形態：右片袖形横穴式石室
全　長 5.4 m
玄室長 3.94 m
玄室幅 1.54 ～ 2.24 m
残存高 1.18 m



第３図　祝谷６号墳の石室配置

第１石室出土遺物

須恵器：器台、広口壺、短頸壺、坏身、坏蓋、脚付直口壺、蓋、横瓶、提瓶

武　具：太刀、銀環、鉄鏃

馬　具：轡、革金具、絞具、辻金具

農工具：鍬・鋤先、刀子、鑿、鉄斧、鎌

鏡　：珠文鏡

装身具：耳環、ガラス玉、碧玉製管玉、水晶製丸玉、瑪瑙勾玉、棗玉

計 約 150 点

第２石室出土遺物

須恵器：短頸壺、長頸壺、蓋、提瓶

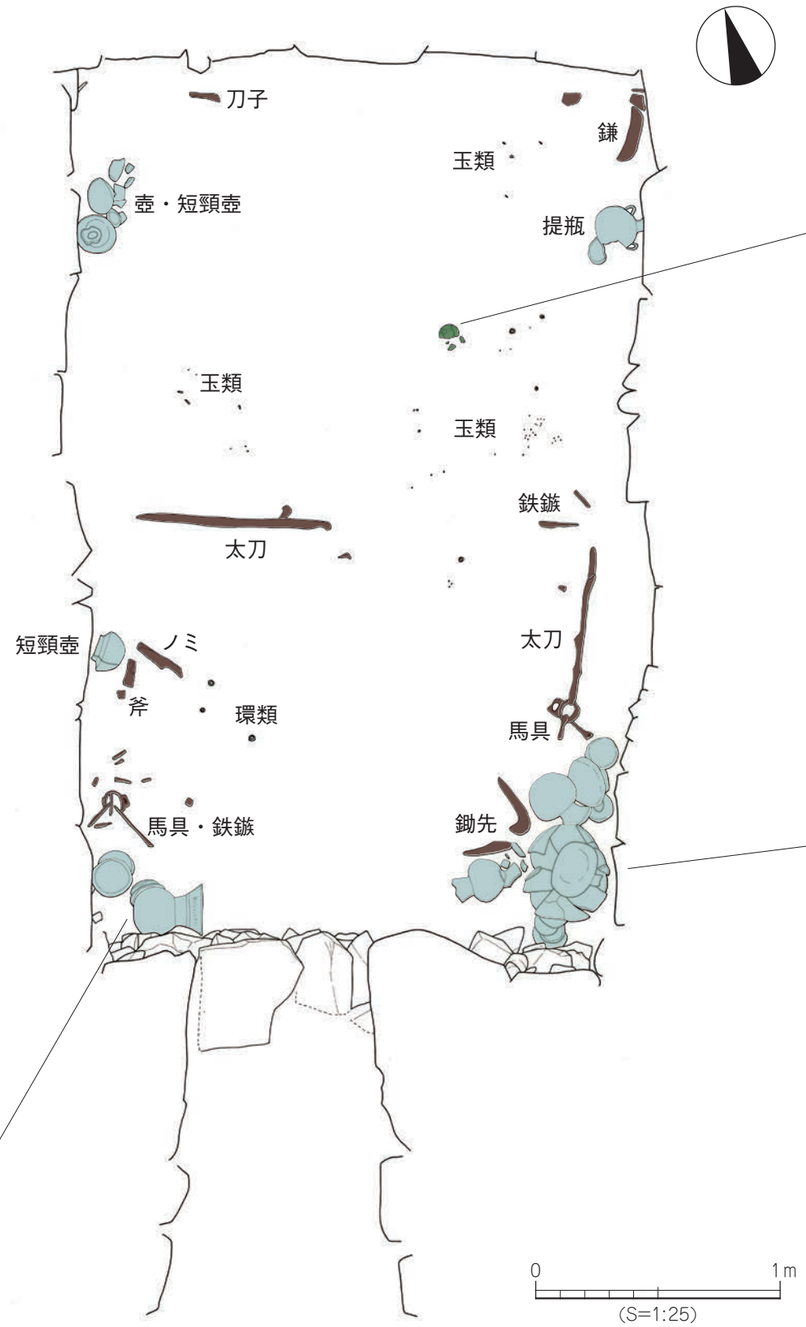
武　具：太刀（1 振は圭頭太刀）、銀環、鉄鏃

馬　具：轡

農工具：鍬・鋤先、刀子、鉄斧、鎌

装身具：銅釧、耳環、ガラス子玉、ガラストンボ玉、碧玉製管玉、水晶製管玉、水晶製切子玉

計 約 80 点



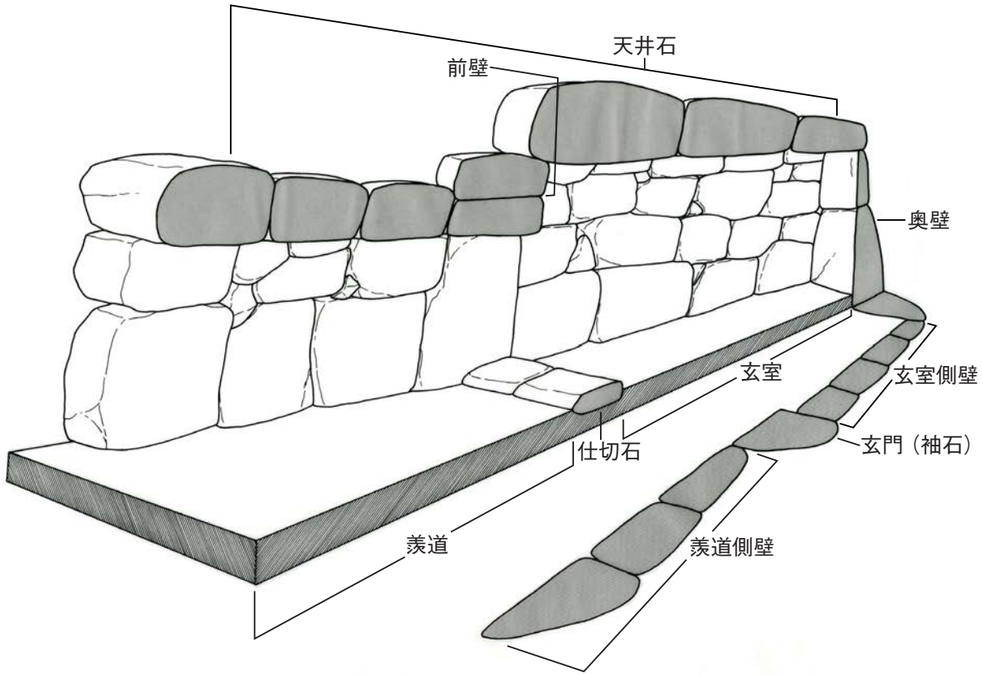
珠 文 鏡

副葬遺物出土状況２

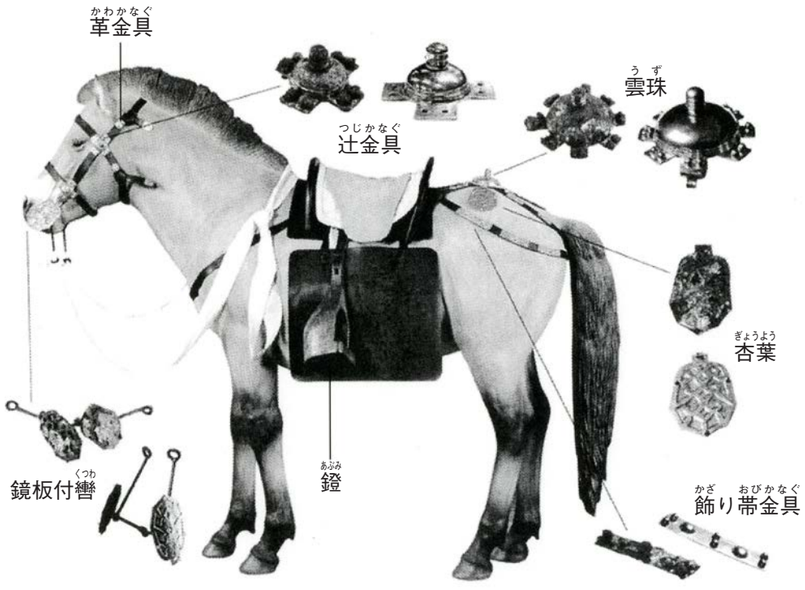
副葬遺物出土状況１

第４図　祝谷６号墳第１石室遺物出土状況

参考資料



横穴式石室の模式図



馬具各部の名称

圭頭太刀（福角町「塚本１号墳」出土）